

金融危機

保険業界への
処方せん PART IV

第2回

「今回の金融危機では、さまざまな金融リスクや市場リスクがテール部分で相関し、従来の想定を超えたシステミックリスクの展開となつたといえる。現在は回復過程にあるものの、経営とりスク・マネージャーの重要な課題は、自社のビジネスモデルを踏まえて、適切なテールシナリオ分析を行い、さらに進んだ資本・リスク管理ができるか否かだ」。このように話すソシエテ・ジエネラル証券会社東京支店の酒井重人(あつひと)氏は、日本価値創造ERM学会(会長:刈屋武昭明治大学大学院教授)の評議員の一人。昨年10月に開催された、「ERM..金融機関と事業法人のアプローチ共通の理解を求めて」と題するパネルディスカッショニン企画者・モデレーターでもある。

近年、金融業界、特に保険業界の間でクローズ

M」(Enterprise Risk Management=全社的リスク管理)という概念。欧米では1990年代から、企業や金融機関が幅広いリスクに対して取り組むため、経営レベルで最高リスク責任者(CRO)やリスクマネジメント委員会を設置する取り組みが始まつたが、多くは個別リスク管理型のリスクマネジメ

日本価値創造ERM学会は、企業全体の価値創

RMフレームワークを公表し、ERMという言葉が広く認識されるようになつたのは承知のとおりだ。

日本価値創造ERM

ナー、キャピタスコンサルティングの森本祐司代表取締役がパネラーとして参加し、現状報告とともに闘争(かつたつ)な意見交換が展開された。

金融機関は業法に基づいた資本規制などの下で、リスク管理は定量的なアプローチが中心だが、事業法人は資本規制が適用されず、比較的定性的なリスク管理を中心に行っている。金融機関でのアプローチでは、定量的なリスクモデルの限界が、特にテールリスクが経験された。おのの

ERMで戦略能力の再確認を

ントの考え方方が中心だつたといえる。

流れを変えたのは2001年の同時多発テロやエンロンなどの不正会計事件。これらの事件を発端に、企業ガバナンスへのより高い基準が要求さ

れるとともに、リスクマネジメントに対する考え方、企業リスクやビジ

造経営プロセスにかかわる有効なERM経営の在り方について研究・調査・交流の場を作り、価値創造ERMに関して、より高い理解を深めるプロセスとして機能することを目指している。

酒井氏がモデレーターを務めた前述のパネルディスカッショニンでは、日本価値創造ERM学会の副会長である東京ガスIR部リスク管理グループの吉野太郎主席、ブライスウォーターハウスクーパーの原誠一パート

に対する対応策の有効性について。

「金融機関と事業法人のそれぞれのERM手法の進行する中、08年10月にソルベントシードの構築のための検討を進めているが、金融危機(I AIS)は、ソルベ

ント

保険業界は今年も大き

く動く。日本でもソルベ

ント・マージン比率の見直しが進められ、国際

財務報告基準(IFRS)

の導入を控える一

くのなかにERMの原点がある」と強調する。

保険監督者国際機構

の構築のための検討を

進めているが、金融危機

にコントロールをしてい

くのかにERMの原点があ

る」と強調する。

保険業界は今年も大き

くのなかにERMの原点があ

る」と強調する。

ソシエテ・ジエネラル証券会社
東京支店
副本
副
社
長

酒井 重人氏に聞く